

---

# 仮面ライダーディクシード

少年C

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

仮面ライダーディクシード

### 【Nコード】

N0281K

### 【作者名】

少年C

### 【あらすじ】

世界を超える者【荒上 凌牙】。

行く先々でなぜかディケイドに間違われ、襲われ、そして全力で叩きのめす。

毎回そんな事やっていたから、付いた通り名が【世界の喧嘩屋】。彼の次の行先には鋼鉄の戦士達がまっていた。

## はじまり(前書き)

この小説は作者の、もしデイクイドみたいに次元を超えるライダーが、メタルヒーローの世界に行ったらどうなるか、という疑問から作られました。

## はじまり

「ドオオオオオン」

爆発が起き、黒煙が立ち込める中一人の男が走っている。

「はあ、はあ、はあ…あークソツ、奴ら一体何なんだ」

余程疲れたのか、近くの瓦礫の山に倒れるようにして座る。

「折角、戦いの無い世界でしばらく休もうと思ったのに………それにしても奴ら一体、俺の行った世界に居たどの組織の戦闘員とも違うし……あアー面倒くせえ」

「キヤアー!!!」

逃げ遅れた一人の青い長髪の少女が謎の集団に囲まれていた。

少女は抱えていたバックを守りながら必死に逃げようとしていた。

バックには何故か虹色の拳マークのステッカーが貼ってあった。

「あつ、あのマーク…ったくもう仕方ねえな」

どうやら男は少女ではなく少女の持っているバックに心当たりがあるようだ。

男は長方形のガントレット型の機械【ディクシードライバー】を取り出し、それを左腕に装備した。

「いくぜー」

何処からともなく出したカードを構える。

「変身」

拳側に開いているスリットにカード入れ、挿入口付近のハンドルを押しこむ。

すると中のカードも押し込まれ、丁度デイクシードライバーの丸い透明な部分に、カード裏面の紋章の部分がくるようになった。

《KAMEN RIDE・DEXCEED》

男の体はいくつかの人の形をした光に包まれ、やがて形作られていった。

最後に5枚のプレートが頭に3つ、胸部に2つ縦に刺さった。

黒のスーツの上の装甲部（胸部、腹部）は白、目は赤色に、顔、肩と腕と足の外側はオレンジ色に輝いていた。

「いくぞオラアア！！」

威勢良く飛び出し正面の敵を殴りながら進むが、数が多くてなかなか進めない。

「ならこれだ」

一枚のカードを取り出し、ドライバーに差し込む。

《ABILITY RIDE KABUTO》

周りの景色の動きがスローになっていく。

一瞬にして集団の中心地に移動し少女を抱え跳び去る。

少女は気絶していた。

ある程度離れたところで少女を降ろし、デイクシードは腰に装備されているカードホルダー型の武器【ライドブラスター】をガンモードにし、乱射した。

普通のライドブッカーと違い、通常より長い銃口が二つ有り、マガ

ジン型のパーツが付けられていて、銃としての機能が底上げされている。

集団目掛けて連射する。

集団の半分が消えたところで、

「面倒だから一気に行くぜ」

《FINAL ATTACK RIDE ・DE・DE・DE・D  
EXCEED》

突然上空から降って来た数枚のカード形のエネルギー体が俺の前に  
ピラミッド状に並ぶ。

「ハアアア!!」

目の前の一枚、ピラミッドの頂点にオレンジ色の光を放つ弾を撃つ。  
一発の弾丸はカードを突き抜けると同時に数発に増え、次のカード  
を突き抜けるとまた弾が数発に増え、また次のカードを突き抜け…  
…の繰り返しでやがてそれはオレンジ色の弾丸の波になった。

【デイメンションウエーブ】は容赦なく敵を飲み込み貫通していく。  
波が過ぎ去った後には何もいなかった。

「つつしゃアア!!」

変身を解く。

「おい、終わったぞー。起きろー」

ぺちぺちと頬を叩くが少女は一向に起きる気配がなかった。

「仕方ねーか」

今度は少女を背負い歩き出す。

しばらくして、男はログハウスの前に着いた。

家に入り手際良く少女をソファで寝かせる。

あと1、2時間で起きるだろう。たぶん。

(しっかし、青い髪に碧眼って随分変わった格好した奴だなー)  
その間にバツクの中身をごそごと取り出してを調べる

「多分アイツの事だから…おっ！あつたあつた」

バツクの内側の隠しポケットに入っていたそれは一枚の手紙だった。

(…多分こうなる事は十分予想出来ていたんだらうな)  
手紙にはこう書いてあった。

『凌牙へ』

休暇満喫中にすまないが、仕事を依頼したい。

メッセンジャーとして送った奴が襲われていた場合、状況は非常に悪く、私はすぐには動けない。

だから直ちに次の事に取りかかってくれ。

- ・バツク奥に入ってるポスターを使っていつも通り他世界に飛べ
- ・その世界を救え

なお詳しい状況について知りたいならその娘に聞いてくれ。

拳人より』

「いつも通りの分かりやすいパーフェクトな説明ですな。ただし…」

「…んっ…zzz」

「肝心のその娘が起きなきゃね」

このまま待っていても仕方ないのでとりあえずその世界に飛ぶ事にした。

部屋の奥の戸を開ける。

戸の向こうには地下へと続く階段があった。

降りるとそこはガレージの様な場所だった。

また扉があった。

その扉に持ってきた何も書かれていないポスターを張る。  
ポスターが一瞬輝き、富士山をバックにした銀色の円盤が描かれていた。

(もしかして宇宙戦争とかそういうヤバめの世界か)

ドアを開けようとしたその瞬間、

「シュツバシツ」

何かが後ろで振り下ろされ、それを手で受け止める。

「…何の真似だこりゃア」

「黙れ、下っ端が」

さっきの少女が(どこに持っていたんだか知らないが)釘バットを再び振り上げた。

完全に敵と間違えてしまっているようだ。

「まあ待て、これを見る」

誤解を解くためにデイクシードのカードを見せる。

「……………!!!」

「ようやく分かったか。大体、人を襲うような組織がソファアに寝せて、介抱したりする筈がないだろ。お前もしかしてバカ？」

「……………//」

恥かしいのだろうか少女の頬が段々と赤くなっていく。  
面白いのでそのままからかう事にした。

「そっかやつぱりバカなのか。それにしても大変だよなバカって。

助けてくれた恩人が敵かどうかも分からないなんてな、「黙れ」っ  
ん何だ、あつやめろ、いややめて下さい!!!」



その瞬間俺は少女の神速の打撃を三発ほど受けていた。

「グバツ」

血を流しながら倒れる。

(つてかこんだけ強いんならあいつら倒せたんじゃないやね)

「その質問の答えはノー。今ベルト持っていないのよ私」

(読心術か!?)

「それにね…「バキツ」木製じゃすぐ折れるのよ」

(ドンだけ力入れてたんだー!)

「それで生きてるあなたもすごいと思うわよ。もう、出ていいわよ

【ディーネ】

『はい』

少女の青い髪、碧眼が普通の黒になり、少女の後ろから青い女性の姿をした怪人が現れた。

「!!!イマジンか」

「そうよ。あと3体いるんだけど、虹原先輩が1体とは性格が合わないっていうし、1体は偵察役になっているし、もう1体は武器製作に携わっていて今居ないのよ」

『それで、その性格が合わない奴が今ベルト使っているから、変身できなかつたと言う訳です』

「先輩の言っていた意味がよく分かったわ。ところでアンター一体誰になっ!…まさか俺が誰だか知らずに来たのか」

「そうよ。とりあえず急ぎの用だったから、バディーについての資料は読まなかつたし。早く言わないと自動的に名無し太郎にするわよ」

「はあ、その耳かつ穿つてよく聞きやがれ俺は【荒上 凌牙】様だ」

「…!!!えっ嘘、あんたがああ【世界の喧嘩屋】!!!最悪だア」

『それって確か他世界への調査に行つて、その世界の中心人物を倒

し世界のバランスを狂わせて危うく世界を破壊し掛けた人ですよね」  
「そうだよ！その荒上凌牙だよ」

「私はてつきり、もつとちゃんとした人ン所に送られるものかと思  
っていたのにイ。最悪」

少女は髪をクシャクシャに掻き乱しながら不満を表現する。

「仕方ねえだろ、戦力的にも単体で戦って行けるのは俺くらいだし。  
てか俺に名乗らせたんだから、さっさとお前も名乗れや」

「【高月 優亜】よ」

『改めまして私はウンディーネです。ディーネと御呼び下さい』

イスに座って踏ん返り返る華音と礼儀正しくお辞儀をするディーネ。  
何ともアンバランスな光景だ。

怒りを堪えつつ、とりあえず状況を確認する。

「でっ、俺の世界は一体どうなっているんだ」

「数日前から複数の世界で急激な崩壊現象が始まりました」

『その世界の欠片が多数の脅威と共に流れ着いて来てしまったんで  
す』

「でっ調査の結果、そいつ等の居る世界の大よその位置が分かった  
から、現象の根本を叩いて被害を少なくしたりするって事になった  
の」

「大体分かった。じゃあ行くぞ」

今度こそ扉を開けた。



## はじめり（後書き）

【荒上 凌牙】 あらがみ りょうが 【仮面ライダーディクシード】

本作の主人公。

ディクシードに変身する。

【世界の墓場の世界】出身。

基本的スペックはずば抜けて高い。

他の仮面ライダーの世界に行くと、ライダーを助けたとしてもディケイドと間違われて（ある人のせいで）、いきなり襲い掛かられる。その場合相手を完膚なきまで叩きのめしてからカードを見せ誤解を解く。

が、その世界のライダーは大抵しばらく戦えなくなるので、その世界に数か月留まる。

その為各仮面ライダーのカメンライド、ファイナルフォームライド、ファイナルアタックライドのカードを持たないが、アビリティライドのカード（詳しくは下記で説明）がライドブラスターから出てくる。

そんな事を何十回もしていたのでついたあだ名が【世界の喧嘩屋】。因みに名前の由来は超えるの意味を持つ【EXCEED】から。

一 【ABIILITY RIDE】 《アビリティライド》

他の仮面ライダーに変身、及び召喚が出来ない代わりにディクシードが使えるカード。

基本的にライダーの大まかな能力を追加できる。

が、特定の条件が無いと使えないモノもある。

例：カブト＝クロックアップ等／高速移動できる敵が近くにいる場合。

J＝巨大化／Jパワーの代わりが有る場合。

クウガ＝ライジング系のパーツで強化／条件なし

など

## ギャバンの世界

ドアを開けるとそこは馬小屋が在った。

近くにあつた看板には【アバロン乗馬クラブ】と書かれていた。

「っでこの世界は一体……」

「あついたいた。当山君」

突然背中を叩かれる。

振り向くと初老の男性がいた。

「ダメじゃないちゃんと馬の世話しなきゃ」

「……まさか」

胸についていた名札を見ると【当山茂】と書いてあり、その横に虹色の拳のマークがあつた。

（ガアアア、あの野郎またいらぬ所で無駄なことしやがつてエー！！）

「さっ、サツサとやった」

「頑張れ」

冷笑を浮かべながらそう言つて優亜は部屋に戻つた。

それから数時間俺は馬の世話をする事になつた。

「まったく烈は何所をほっつき歩いてるんだか。これじゃまた給料下げなきゃ」

「父さん何所にいるんだ」

青年が一人橋の上で黄昏ていた。

「お前が【一城 レツ】だな」

「っ！誰だ！！」

烈が振り向くとそこには様々な格好をした10人位の男がいた。リーダーと思われる黒いスーツ姿の男が話を続ける。

「この世界で私達がやるうとしている事に、彼方が邪魔なんですだから消えて下さい。ガア！！」

目の前にいた男達が姿を変えやがて怪人になった。

「なっ！」

男はその怪物がグロンギや改造人間と呼ばれているものだとは知らなかった。

が、男は今までも似たようなものと対峙してきた為、対処は素早かった。

「ハッ」

手前にいた怪人を一体蹴り飛ばし、殴り進みながら退路を確保しようとする。

「貴様ら【マクー】かっ！」

黒いスーツを着た男だった怪人【蜘蛛男+D(+デイスパイダー)】は糸で烈を捕えて、橋の下のコンクリートで舗装された河原目掛け投げた。

『いいえマクーなどと言う陳腐な組織ではありません。彼らも我々の崇高なる目的のためにいずれ傘下に収まるでしょう』  
烈は受け身を取って着地。そして、

「蒸着！！」

ポーズをとり、天に向かって手を突き出す。

烈の体が一瞬にして銀の戦士に変わっていた。

近くにあった河の満水を知らせる建物の屋上に跳び、そこで

「宇宙刑事ギヤバン」

名乗りを上げた。

そこから飛び降り、落下地点にいたカマキリ男を殴り飛ばす。

更に空中からこちらに接近してきた蝙蝠男を

「シルバービーム！」

指先から出る光線で撃ち落とす。

『さすがですねえ』

蜘蛛男 + D はまだまだ余裕の表情だった。

突然河の中からメ・ギイガ・ギが現れ、墨の様な物を噴いて攻撃する。

「うわアアア！」

奇襲に反応できずまともに喰らい、当たった所が小爆発しコンバットスーツから煙が噴き出す。

怪人たちはここぞとばかりに攻め立てる。

コブラ男は手で叩き、ズ・ザインダは突進、メ・ガリマ・バ手に持った鎌でメ・ビラン・ギ腕につけた鋭いヒレ状のカッターで斬り裂きズ・メビオ・ダは跳び付いてくる。

「ぐっ、ウウ」

何とか持ち直してすぐに投げ飛ばす。

河原には続々と怪人が集まってきていた。

「くっ！」

(このままではマズイ)

他の怪人たちも一斉に押し寄せてきた。

「助けてやるか？」

「!?!」

『!?!』

《KAMEN RIDE・DEXCEED》

そんな電子音がいきなり後ろでした。

振り返るとそこにはバイクに跨ったオレンジ色の戦士がいた。



見下ろすとそこには怪人に囲まれている戦士がいた。

『墓場の使者ですか。面白い。行けっ!!』

蜘蛛男+Dの命令に従い数体の怪人がこちらに向かってくる。

(久々にアレやるか)

バイクで土手を下り怪人の集団に突っ込む。

(行くぜ、【デイクシーダー】)

愛機の名前を心の中で唱える。

数体轢いて前輪にブレーキを掛け、その反動で後輪を浮かせる。そこから、

「後輪ビンタ」

後輪を近くにいた怪人の顔面目掛け叩き込む。

集まってきたいた怪人達も巻き添えを喰らい一回転するころには4体の怪人がのびていた。

「ほっ!!」

ノーズリフトで今出来た障害物(怪人)を越え、同じ手法で更に2体倒す。

ズ・ザインダが突進してきていた。

こちらも加速しながら迎え撃つ。

「ハッ!!」

バイクごとジャンプし、突進避ける。

《ATTACK RIDE FOLLOWING SHOT》

ライドブラスターを空に向け数発撃つ。

弾は自動的ズ・ザインダに向かって飛んでいった。

「ふう、ハッ!!」

体を横に投げ出す。

零コンマ秒前まで俺の居たところには針が刺さっていた。

メ・バチス・バが空を跳びながら放ったものだった

《ABILITY RIDE KUUGA》

ライドブラスターに黄金のバレルが装備された。

「ダアッ！」

射程距離、命中精度、威力が上がったライドブラスターから矢状の光弾が発射される。

一直線に進んだ矢はメ・バチス・バの胸を貫き爆発する。

「ふうー」

再び一息ついたデイクシード、だが後ろからメ・ギイガ・ギがまた墨の様な物で攻撃しようとしていた。

「レーザーブレード！」

が、ギヤバンがいつの間にか持っていた剣レーザーブレードでメ・ギイガ・ギを斬り阻止する。

「ギヤバン・ダイナミック！！！」

刃を掌でなぞると剣が青白い光を放ち、それを大上段に構え一気に振り下ろした。

メ・ギイガ・ギは真っ二つになり、爆発した。

「くっ、撤退だ！」

蜘蛛男+Dは数体の怪人と共に突然現れた灰色のオーロラの様な物の中に消えていった。

二人の戦士は変身を解いた。

「あなたは一体？」

烈が凌牙の方を向く。

するとその顔が固まった。

「と、当山さん？」

「あっ、コレ外すの忘れていた」

当山は胸の名札を外した。

烈の眼には今度こそ凌牙の姿が映った。

「えっ、一体どうなってるんだ？」

「それについても後で色々話すから、まずこの世界の事を教えてくれ」

「あ、ああ……」

「数ヶ月前から、この星は【マクー】による侵略活動を受けている。俺はバード星にある銀河連邦警察より地球を守るために宇宙刑事として派遣されたんだ。

そして数週間前ある事が分かったんだ……。

一つ目は数年前から行方不明になっている俺の父ボイサーがある重要な情報を守りながら、マクーに捕まっているという事。

二つ目はさつきみたいないなマクーじゃない奴等がよく人を襲うようになったんだ。しかも奴等、どうやら近々マクーを傘下に収めるみたいなんだ。流石のマクーもあの戦力は無視できないだろうからね。」

「成程」

「俺はまず父を救出しようと思う。恐らくたび重なる拷問でもう限界が近いかもしれないから……。さあこっちは話したんだ次は君の番だよ」

「まずこの名札は目的を円滑に進めるための物。俺の御節介な上司が必ず付けてくる。その世界の中心人物つまりお前に近い位置の人間に化ける装置だ。

そして俺は異世界、もしくは他次元と呼ばれる所から来た。

目的は多分あの怪人たちを退治する為だ。俺のいた世界は【世界の墓場】と呼ばれている」

「世界の墓場？」

「元々この世界も崩壊する筈だったんだが、【セイガ】って奴が踏ん張って如何にかしたらしい…。」

まあその反動で、世界の欠けた部分に他の崩壊した世界、しかけた世界の欠片が良く流れ着くからだ。大概は悪い物に乗っけて。だから俺達は流れ着いたモノから自分達の身を守れ対抗出来る力を得た。だが最近この世界、近い世界で急激な崩壊が始まっているらしい。流星にそれを処理できないから何チームか作って、色々な世界に送り大元を断ってくる事になった。でっ俺の担当がこの辺りの世界ってわけだ。」

そこで一旦話が終わる。

「あつ、やべ買い物の途中だった」

凌牙はバイクに跨りその場を後にした。

『ギャバン、ギャバン』

「ミミミ帰って来たのか」

烈が近くにいたカナリアに話しかける。

『ええ、それよりも大変よ。宇宙空間を漂流していたハンターキラーが保護されたのよ』

「！。ハンターキラーが！」

『コム長官の尋問で彼方の父ボイサーは剣山にいるといったそうよ』

「そうか、ありがとう」

烈はそう告げ走り出した。

『フフフフフ………』

カナリアが不気味に笑った。

その姿はいつの間にか怪人に変わっていた。

『いかがですかドン・ホラー様』

蜘蛛男+Dはそう言った。

マクローの首領ドン・ホラーは目の前のモニターを見て満足げに笑った。

モニターの横には鳥かごに閉じ込められたカナリア（ミミィ）がいた。

『ふむ、例の条件を飲もう。ただしこの作戦が失敗したらすべて白紙だそれでいいな』

『はい。そちらはあの戦士の方をお願いします』

蜘蛛男+Dがお辞儀をした。

その顔には不敵な笑みが浮かんでいる。

『それでは……』

蜘蛛男+Dは灰色のオーロラの中に消えた。

『良いのですかドン・ホラー様？』

魔女キバがドン・ホラーに尋ねる。

『良い、良いそれで憎きギャバンを倒せるのなら。例え倒せなくても弱ったところを我らが攻めれば良い』

『しかし、彼奴らの傘下に入るといのは……』

『この世界は任せてくれるそうさ。それに……戦力が回復したら我らが取って代われればいいだけの事。そのためにもまずはギャバン。』

そしてあの戦士を倒せば……フフフ。

行けバツファローダブラー』

「~~~~~」

凌牙は鼻歌を歌いながら法定速度ギリギリで走行している。

（いやー、良かった良かった安売りしてるスーパーが見つかった）  
バイクの後ろには焼きそばの麺とキャベツが乗っかっていた。

「~~~~~。!!!?」

突然何かが横から飛び出てくる。

「ハッ！」

ブレーキを掛けドリフトの様に停車する。

反動でキャベツが転がっていく。

「グシャッ」

それを怪人が踏み潰した。

「俺はバツファ」《KAMEN RIDE・DEXCEED》

ボツ！」

（先制攻撃）

仮面の下で邪悪な笑みを浮かべながら拳を振り下ろす。

力の限り、馬乗りになって何発も。

「バキッ」

（大事なお角が折れました 報酬素材は増えるかな）

「おらッ、キャベツ君の痛みはこんなもんじゃねえんだゾコラッ！」

そこからアングルホールドに入る。

（そろそろ関節外れるかな？）

「ぎゃあああああああああああ！！！！」「バキッ」……………

……

急に沈黙したバツファローダブラー。

（気絶しちゃったか。とりあえず情報聞き出さないといけないか

ら、引き摺って帰るか）

人間の姿に戻り、ロープで怪人を縛る。

とある世界

「先輩すみません、はい今すぐ超速ダッシュで買ってきます。はいっ」

携帯で何か話をしている青年の横にはグシャグシャになったエクレアと謎の金属片が散らばっていた。

【+怪人】

モチーフが同じ怪人の融合体。

ベースになる怪人+付け加えられた怪人

例：蜘蛛男+D

蜘蛛男の体にデイスパイダーの足。

ギヤバンの世界（後書き）



## ギャバンドル

(父さん今助けに行く)

ジープで山道を上がっていった。

そのとき横から何かがレツにぶつかって来た。

「リヤアアア」

横から何かが烈にぶつかって来た。

「うわっ」

レツはジープから投げ出された。

『フフフフフフ……』

突如山に木霊す不気味な声。

「この声、まさか……」

『もう遅いですよ』

周りを見渡すと怪人に囲まれていた。

中には河原での戦いで生き残っていた怪人もいた。

「どうゆう事だ」

『鈍いですねえ。あれは全部罠なんですよ』

蜘蛛男+Dの肩に止まったカナリアが機械の姿になった。

更に持っていた鳥かごユラユラと揺らす。

その中にはミミー(カナリア体)がいた。

「ミミー!!そんな」

「ギャバン逃げて!」

ミミーが叫ぶ。

「大丈夫だミミー。蒸着!」

コンバットスーツを身に纏う。

「ダアツ!!」  
怪人軍団に挑んでいく。

「ハツ!!よつと…」

山道を駆け上がる一台のバイク。  
乗ってるのはもちろん

「祭りの場所は何所だー!!」  
凌牙です。

あの後怪人に拷問…じゃなくて尋問でこの場所と敵の企みを聞き出したのだった。

「んっ？」

坂を登りきると切り開かれた場所に出た。

(これは…)

元々切り開かれていた場所だったが、明らかに戦闘によって切り崩された木が何本もあった。

近くにはまだ灰色のオーロラが残っていた。

「グっ、うっ」

ギャバンは壁にめり込んでい。

『ハアハア。ツガアアツ!!ナゼダ?アノテイドノセンリヨクニコ  
コマデダメージヲウケルナンテ!!』

ワカラナイ!!ワカラナイ!!』

ダメージのせいだろうか、言語機能に障害が出ていた。

蜘蛛男+D頭を抱えながらも、複数の灰色のオーロラを出し次の怪人を呼び出していた。

「成程、畏かと思つてたけど、ただ単に次元移動能力に異常が出ていた訳だ」

『！！ドウヤツテココニ』

「扉を閉めずれてるからだよっ！！」  
飛び蹴りを喰らわす。

「それとさっきの疑問の答えを教えてやるよ。理由は単純明快、数に頼り過ぎてテメエらの質が落ちてるからだよ、ポンコツ量産型ども！！」

それにコイツは宇宙刑事。例え一人でも星を守ろうとする魂が有る！！」

『ダメレ！ダメレ！ミナゴロシダアアア！！！！』  
あらゆる世界の蜘蛛をモチーフにした怪人が現れた。

「その喧嘩買った！！」  
カードをドライバーに投げ入れる。

独特の待機音が流れ、ハンドルを拳を鳴らす様に押し込む。

《K A M E N R I D E ・ D E ・ D E ・ D E ・ D E X C E E D》

「もつと見せてくれよ。あんたの魂を！！行くぞ！！」  
それぞれ何体かずつの怪人と戦つていく。

「ハアアアツ！！」

ギャバンはレーザーブレードで次々と怪人を切り裂いていく。

「ぬりやアア！！」

一方のデイクシード肉弾戦で怪人を倒していった。

「ウオオオ！！ダ○ルチョップ！大○輪投げええ！！」

他世界の技を使いながら。



『HYAAAAA#\*?~!~!~!~!~!~!』  
狂喜のシャウトが遠くで聞こえる。

「ぐううウツ……………」

あまりのダメージに変身が解かれていた。

「ぐっ……………」

隣に倒れている烈も生身の状態になっていた。

立ち上がるうとしたがダメージで再び地に伏せてしまった。

その時、レツの革ジャンの中から懐中時計の様な物が落ちた。

「~~~~」

場違いなメロディーが流れだした。

「…………ぎゃ…………あ…………ばん…………」

どこかから声が聞こえた。

「…ギヤ…バン」

また聞こえた。

辺りを見回すと、近くの牢屋の様な所に入った男がこちらを見ていた。

「まさか……………」

「父さん?!」

レツが近づく。

「ギヤバン……………」

むこうも必死にこちらに近づいてくる。

『グワアアアアツ#\$”?+>\*!~!~!~!~!~!』

(あんのKY蜘蛛め!~!~!~!~!~!)

「もう一回いけるか」

「ああ。父さん待ってて」

「ギャバン……」

「変身!!」

《KAMEN RIDE ・ DE ・ DE ・ DE ・ DEXCEED》

「蒸着!!」

ライドブラスターから3枚のカードが射出された。

「こいつはまさか……早速使うか」

《FINAL FORM RIDE GYA ・ GYA ・ GYA ・ G  
YABAN》

「ちよいと、くすぐつたいぜえー」

背中に手を当てる。

「何を……ひゃう!?!なんだ?」

ギャバンの体が瞬く間に文字通り【変形】していった。

出来た姿はまさしく龍だった。

『これは?』

「俺とおまえの力。【ギャバンドル】だ。さっさと行くぜ!!」

『ガアアッ!!』

ギャバンドルは空高く舞い上がり、口から火球を吐き出し攻撃。蜘蛛の足に次々とダメージを負わせていく。

「銃が駄目なら拳でねっ」

《FINAL ATTACK RIDE ・ DE ・ DE ・ DE ・ D

EXCEED》

「せめて倒れはしてくれよッー!!」

目の前に現れたカード形のゲートの中を拳を腰に溜め走り出す。足の前に近づいた所で、

「ッハアアアー!!!」

エネルギーが集まった一気に右腕を伸ばし殴る。

デイクシード最強の技【デイメンションナックル】が決まった。

『GYOOOOOTTU!!』

バキツと足が折れた。

「よっしやっ、動きは止めた次はトドメだ!!」

《FINAL ATTACK RIDE GYA・GYA・GYA・GYA・GYA BAN》

デイクシードはギャバンドルの背中に飛び乗る。

ギャバンドルの口にエネルギーが溜まりやがてそれを放つ。

数秒間放出されたその光線は巨大な蜘蛛を焦がしていく。

ドンッ!という爆発音とともに巨大な蜘蛛が真上へ飛ぶ。

「ハアアアアッ!!!」

背中から軽く跳んだデイクシードをギャバンドルは尾で蜘蛛集合体の方へ打ち出す。

「リヤアアアー!!!」

加速したデイクシードは拳を突き出して暴走した蜘蛛集合体に一つの弾丸と成って突っ込んでいった。

拳で風穴を開く。

蜘蛛集合体はデイクシードが着地すると同時に爆発した。

二人同時に変身を解く。

「さっさと行ってやれ」

レツにそう言っただけ俺は一足先に帰った。

「父さん…」

「ギャバン」

レツは自らの父ボイザーに抱きついた。

「父さん…」

「強くなつたなギャバン、いやレツ…」

二人はしばらく再会の喜びに浸っていた。

「たっただいまー」

自宅のドアを開けた途端、バシッツと何かが俺の顔にクリティカルヒットした。

掴まんで見るとそれは所々が赤くなった雑巾だった。

「凌牙。あの後血だまり拭くの大変だったんだからねエエ！」

『拭いたのは私ですけど？』

ウンディーネがさかささずつつこむ。

「ああ分かったからさっさと次の世界に行くぞ」

「えっ、記録はしなくていいの？」

「記録しなくても大丈夫なんだよ俺の場合」

ポスターの絵が変わった。

変わった形のパトカーが街を疾走している絵だった。





## ギャバンドル（後書き）

### 【ギャバンドル】

ギャバンがファイナルフォームライドした姿。

ギャバンの世界の電子星獣ドルを模している。

口から火球を吐く事が出来る。

必殺技は口にエネルギーを溜め一気に放ち、それで敵を打ち上げ、それをデイクシードが殴り抜く【デイクシードダイナミック】。

それと次の世界は当て嵌まる作品がたくさんあるのでここでヒントを。

ヒントは神と悪魔です。

特捜・赤・青・黄（前書き）

今回はオリジナルのメタルヒーロー？が出てきます。

特捜・赤・青・黄

「さてこの世界はどんな世界か」

そう呟き、外に出た凌牙の格好が変わった。

「最初から服装だけ変わる設定にしときゃ良かった」

エプロンの様なものを着、ネームプレートには【りょうがせんせい】とひらがなで書かれていた。

完全に幼稚園や保育園の先生になっていた。

「……」

言葉を失う凌牙。

「!…プッ」

それを見て、あまりの可笑しさに耐え切れず嘔き出す優亜。

「テメエ何笑ってんだよ」

「あつ、凌牙先生迎えが来てますよ」

丁度子供たちを乗せたバスがこちらへやって来た。

「行ってらっしゃいませ」

家の扉を半開きにしてこちらに手を振ってくるディーネ。

（見つかったらヤバいもんな）

そんな事を思っている中にバスが止まりドアが開いた。

乗りこむとすぐ近くにいた少女が小声でこう言った。

「彼方、誰？」

「凌駕先生だよ」

「ふん…」

怪訝そうな顔をしていた少女だが、そのうち窓の外の景色を眺めていた。

そこから数分間、子供達の騒ぐ声をBGMにバスに揺られる凌牙であった。

「ZZZZZ…」

いつのまにか寝てしまったようだ。

目を開けると、明らかにバスジャック犯ですという恰好をしている輩が子供達に銃を向けていた。

（なあんだ、ただのバスジャックか それならよし）

「つて、なんでバスジャックされてんの!？」

思わず大声を上げる。

「嫌いぞ!黙ってる!」

こちらに主犯格と思われる女が銃を向けた。

反射的に両手を上げる。

「凌牙先生が寝てる間に襲われたんですよ」

小声でそう教えてくれた先生A。

「お前もこっちに来い」

そう促されバスの後の方へ移動する。

バスの真ん中くらいの所に怪しげな機械が有ったが、特に何も聞かずに移動した。

（しっかしどうすつか。こう狭い場所だと動きズライし、変身しても人質取られたら終わりだし…）

「ドンツ」とバスに衝撃が奔った。

外を見ると赤い装甲の戦士が走って近づいてきていた。

しかしバスとの間に見えない壁の様な物があり、それでもバスを何処かに押すように火花を散らしながら体当たりをしていた。

恐らくさっきの機械でバリア的なモノを張っているのだろう。

その赤い戦士の後ろから後部に機関銃の様な物に乗せた車が追っ  
てきていた。  
それに乗っているのも赤い戦士と同じような装甲を纏った、青と黄  
色の戦士だった。  
黄色い方が機関銃の様な物から消火剤を赤い方に掛け火花を消して  
いた。

(ひとりあえずこれを破壊すれば万事解決か?)

ライドブラスターを取り出そうとした時、

『バリアを止める！ これ以上作動を続けると自爆するぞ！破壊も  
ダメだ！逆に瞬間的に出力をおかしくして爆発する！』

赤い戦士の声を聞き、ライドブラスターをしまふ。

そして続けてこう言った。

『これからこのバスを崖から落とす。衝撃に注意しろ！』  
「はっ!?!」

その刹那、俺は浮遊感に包まれた。

バスが真つ逆さまに落ちていく。

全員目をつぶっている。

何はともあれチャンスだ。

「変身」

デイクシードライダーにカードを装填する。

『K A M E N R I D E D E X C E E D』

赤い戦士が空中でもうひと押しし、大きな水溜りのある方へ落ちた。  
水の浮力とバリアの御蔭で衝撃はほぼ0だった。  
が、その影響で赤い障壁が見えるようになった。  
赤い戦士はその障壁に入ったヒビを攻撃していた。

「あそこを撃てば…」

ライドブラスターで内側からも攻撃する。

『!!!? 誰だ!』

「唯の正義の味方だが?」

暫らくするとバリアが砕け散った。

『手伝ってくれ、後1分で爆発する!』

「分かった」

遅れてやって来た2人も加わり次々と人を降ろしてゆく。

「助けてエエ!」

主犯格の女の足が落下の揺れで座席に引っ掛かり動けなくなっていた。

『待つてる』

警棒の様な物を座席に叩きつけ座席を壊していく。

『叶野体長! 時間が有りません!』

既に子供達を連れてバスから脱出した青い戦士がそう言った。

黄色い方は怪我人の手当てをしていた。

『ATTACK RIDE LASER BLADE』

ギャバンの武器レーザーソードを発現する。

「ハッ!」

座席を一気に斬り裂く。

女性を抱え上げ、脱出しようとした時と装置から赤い閃光が飛び出したのは同時だった。

「叶野隊長オオオオオオオ!!!」

大爆発するバス。

赤い装甲の破片が飛ぶ。

「隊長…」

「大丈夫だ……」  
まだ燃え上がるバスの下から2人の戦士が女性を抱えて現れた。素早く水の中に身を隠したのが幸いしたのだろう。赤い方は胸部とヘルメットが破損し、素顔を覗かせていた。デイクシードはまあ無傷だった。

岸にたどり着き女性を降ろす。

黄色が手当てを始めた。

が、いきなり驚きの声を上げた。

「たっ、隊長これを見て下さい」

女の腕には6の文字を三つ巴の形に並べたタトゥーがあった。

「これはっ……」

(あれっ、そう言えばさっきの女の子は？……まっいいか)

「そんじゃまあ俺はこ」「ジャキッ！」はいつ!?!  
いつもの癖で退散しようとするデイクシードに青と黄色が銃を向ける。

「銃刀法違反で逮捕する」

(あっ、やっぱりそうなっちゃいますか?)

「銃を降ろせ」

「叶野隊長……」

「何はともあれ救助に協力してくれた人だ。失礼だろう」

叶野と呼ばれていた男は俺の肩に手を置き、

「しかし、話は聞かないといけない、逮捕とまではいかないが同行を願います」



(警察は嫌いなんだが…仕方ねえか)

「いいスよっ」

変身を解き、車に乗る。

「……なるほどそういう訳が有ったのか」とりあえず、大体の事は言った。

初めの内は黄色と青い戦士だった男とその上司と思しき男性は怪訝そうな顔をしていたが、この世界の科学力ではライダーシステムを作れない事を説明し、ようやく分かってくれた。

「つて、ことは俺らの世界にも危機が!？」

青い奴、名前は確か【村尾コウ】で装甲を纏うとブルース。

因みに黄色が【大間ケン】、キース。

赤い隊長の名前が【叶野ハヤト】でレッダー。

オペレーター的女性が【日向アイ】。

一番偉い役職の【桂郷吉】。

「そう言う事。だからさっきから変わった事が無いか聞いてんだよ。あとこの組織の説明よろしく」

ちよっと挑発的に言うくとケンが殴りかかろうとしてきたがハヤトがそれを制し、話を始めた。

「数年前から多発、多様化する凶悪犯罪に対抗する為にこの組織、

【エクシードラフト】設立された。

実際はいくつか前身があったが今は海外で活動したり、解体されて各警察に分かれている。

その時の技術を応用して作ったのがこの【トライジャケット】だ」

モニターに先程の装甲の画像がでる。

「これを駆使して俺達は今まで様々な事件を解決してきた。が、一向に犯罪の件数は減らないうえに、更に凶悪化していった。そこで、今までの事件を洗いなおした。すると、一人の人物にたどり着いた」

「【大門蔵哉】。今日日本でトップの会社組織、大門コンツェルンの総裁です」

アイがモニターに写真と情報を映し出しながらそう言った。

「この大門に、逮捕者の大半が何かしらの接点を持っておりこのタワーを体のどこかに刻んでいました」

次に映し出されたのは、ここに来る前に手当てを受けていた女がしていた同じマークのタワーだった。

「しかし半年前、大門は突然姿を晦まし数日後遺体になって発見された。

その頃に一度犯罪件数が激減した。そして、このタワーをした犯罪者は居なくなった。筈だった…」

「だから驚いたんだな。またそいつらが見つかったから」  
そこで突然サイレンが鳴った。

「ポイントE 02の薬品の研究所で数体の戦闘ロボットが暴れているそうです」

それを聞いて一同は駆け出す。  
が、ハヤトと俺を桂が止めた。

「部外者を任務に出すわけにはいかない、それとハヤトお前のトライジャケットは修理中だ。ここでサポートを。日向君、私が出る」  
「新造品の【ブラッカー】ですね」

「そうだ」

そう言つて部屋を出ていった。

「お手並み拝見？（もう十分見ているが）」

「『実装！』」

車内でアクセスロックという端末を席の脇の差し込み口に刺し、それぞれを装甲を纏う。

研究所の様な場所に二台の車が着いた。

ブラッカーが車から降り、手帳を構える。

「特捜、エクシードラフトだ！」

「ハアア大旋風蹴り！！」

キースが戦闘ロボットに体を回転しながらの強烈な蹴りを入れる。その後も肉弾戦でロボットを破壊していく。

「フツ」

ブルースが精密な援護射撃を行い。

「ハッ！」

ブラッカーがあまりを腕に着いたドリルで確実に破壊していく。そうやって研究所の中に入っていった。

人工衛星から撮影した映像を見ながら

「原因はどうかやら研究所のメインコンピュータが何者かのハッキングを受けて暴走したものと思われます。施設にはまだ数十体のロボットがいます。起動される前に速やかにコンピュータの破壊を」  
しかしここで不審な点に気付く。

「何で薬品の研究所に戦闘ロボットが？それに人が一人もない」  
「たしかに」

「思った通りだ。この会社も大門コンツェルンと繋がっている。恐らくここで戦闘ロボットの研究と開発をしていたのだろう。気を付ける罠かもしれない」

コンピュータを操作しながらハヤトが答えた。

『『うわああああアアアア！！』』  
スピーカー越しに突然、コウとケンの絶叫が聞こえた。

後ろからは爆発音の様な物が聞こえた。

「何が有った！？コウ！ケン！応答しろー！コウー！！ケン！！」  
「本部長応答してください！」

別のモニターを見ると研究所が大爆発を起こしている映像が出ていた。

爆風に飛ぶ二人のヘルメット。

「嘘だろ…コウ…ケン…」

ハヤトがその場に膝をついた。

『フハハハハッハッ！！！！』

今度はスピーカー越しに笑い声が聞こえた。

『レッダーよ。私は蘇った。悪魔の王として』

炎の中で黒い影が揺らめいた。

「この声、まさか…大門！！貴様か！」

モニターを睨み続けるハヤト。

その時、突然ドアが開いた。

銃を持った警官が入って来たのだ。

「叶野ハヤト！お前を大門蔵哉、殺害の容疑で逮捕する」

「どう言う事だ？」

「捜査続行の結果、凶器が見つかり、それについていた指紋が一致した。それにあの日お前は大門と会っているな！」

「ハヤトの眼が見開かれる。」

「どうしてそれを…？」

「桂本部長からの情報だ」

「手に手錠を掛けられる。」

「違う俺はやっていない！」

「うるさい！来い！」

抵抗しながらも連れて行かれてしまった。

「…おい、幾等なんでも出来過ぎだろ…完全にエクシードラフトの機能停止しちゃったぞ」

「アイの方を見ると青ざめた顔でずっとパソコンを見つめていた。」

「…そんな」

「そう言っただけは気絶してしまった。」

「わずかな時間でエクシードラフトは完全に機能を停止した。」

『やっぱり、彼方が来た所為ね』

「誰だ!？」

「振り向くとバスに乗っていた女の子がいた。」

『デイケイド、やっぱり悪魔と手を組んだのね』

「ちよつと待て俺はデイケイドじゃない」

『嘘よ彼らはあなたの事をそう呼んでいたわよ』

「彼ら?」

『行くわよ』

何所からともなくサンタクロースが現れアクロバティックな動きをしながらこちらに近づいてきた。

「飛んだ配達人だな…しかたねえ…行くぞ!!」

『K A M E N R I D E D E X C E E D』

「子供だろうと容赦しねえ!降りかかる火の粉は払わせてもらっせ  
!」

『A T A C K R I D E L A S E R B L A D E』  
レーザーブレードを構える。

「私はただの子供じゃない、天使ミカエルよ」  
サンタ軍団が雪崩の様に攻めてきた。

その後ろには巨大な翼を生やした天使ミカエルがいた。

同時刻。

突然、銀色のオーロラが発生し、一人の青年と一台のバイクを残して消えた。

「あれえ?ここ何所だ??」

この世界にもう一人のライダーが降り立った。

特捜・赤・青・黄（後書き）

【ブラッカード】

基本カラーは黒と黄色。

デザインは頭部はレッダー、上半身がブルース、下半身がキース、右腕にドリルを取り付けている。

【バトルジャケット】の試作品を桂本部長が実戦用に改造した。

【ターボユニット】使用可。

なんかとんでもなく無理やりな話になりました。

## 魂の兄弟達よ

「うらアアッ!!」

迫りくるサンタ軍団をレーザーブレードで斬り裂いて行く。  
勿論あそこで戦うのは不味かつたんで駐車場に場所を移して。

「今年はクリスマスプレゼント貰えねえかもなッ!」

(今思ったけどこの構図えんじゆだと俺悪役じゃね?)

「うおおオオ…ギャバンダイナミック!!」

光り輝くレーザーブレードをコンクリートの地面に叩きつける。

衝撃で何体かのサンタが飛ぶが、すぐに起き上がってこちらに向かってくる。

「初めて使うタイプのカードだが…」

《WARRIOR RIDE・GYABAN》

デイクシードの姿がダブリ、イリュージョンのカードを使った時の  
様にもう一人のデイクシードが現れその姿はギャバンに変わった。

二人は同時に走り出し、同時に右腕で同じ敵を殴った。

「……」

無言で召喚したギャバンを睨むとむこうも睨み返してきた。

「お前は向こうの方からやれ!」

同時に同じ方向を指差し怒鳴る。

「ちよつと俺に喋らせる!」

そうしている間に近づいてくるサンタ軍団を二人は睨み合いながらもレーザーブレードで斬り伏せていく。



「まさか、お前このカードがどういうカードだか知らずに使ったのか？」

「そうだが」

ギヤバンの質問に潔く応える。

「このカードは使用者の擬似人格を使っただよっ！」

「ハア？ツ！」

「つまり戦闘能力は一条レツのギヤバン、攻め方とかの性格はお前なんだよ」

「何だそのっ！面倒くさい設定はっ！」

「仕方ねえだろっ！！短時間じゃ戦闘能力はコピーできても性格までは無理なんだからっ！！」

口喧嘩しながらも二人は確実にサンタの数を減らしていく。息ピッタリです。

どこぞの正義超人コンビばりに。

「あっ、コレ使えばいいんだ」

《FINAL FORM RIDE GYA・GYA・GYA・GYA・GYA》

「テメエ覚えとけよ」

そうは言っても素直にファイナルフォームライドされるDギヤバン。

『ガアアアア』

周りの敵を火球で焼く。

「気分悪りいんだよ…さっきからディケイドとか言う会った事の無い奴に間違われるのはよっ！」

最後の一体を蹴り飛ばす。

「さあ残ったのはアンタだけだぜ」

『くっ、流石悪魔ね…』

ミカエルが手を前に向けた。  
その時、

『止めるんだミカエル』  
気を失っていたはずのアイが立ちあがり、しかもその声は少年の様なとにかく男性の声になっていた。

『ミカエルその人たちはデイケイドではない。君は偽りの事実を真実と誤解しているのだ…』

アイ？が手を翳す。

『今君に掛けられた術を解く』

アイの手が光り輝く。

するとミカエルから針の様な物が出てきた、と同時にミカエルは気を失ってしまった。

『済みませんね。操られたとはいえうちの子が…ところで君がこの世界を救う者かい？』

「たぶん…ってかあんた誰？何者」

『神ですよこの世界の。まあ今は胎児の状態ですが』

「はっ？」

『まっ、色々あるんですよ神様にも…ところで』

モニターが点くとそこに一人の男の姿が映し出される。

『彼、君と同じ波長がする漂流者なんだけど…知り合いかい？』

モニターに映る顔を良く見ると知り合いだった。

「【勝也】がなんでここに…おいギャバンちょっと迎えに行つて来い」

『G A ッ？』

「俺は神様と話をするから…」

一瞥するとギャバンドルはこの場所から出ていった。

この世界迷い込んだライダーを連れてくるために。

「っで、本当のところ一体どうなってるの？この世界は」

『まあ所謂、アルマゲドンってやつですよ』

「おいおい、いいのか世界の滅びについてを流暢に語りだして」

『まそれは置いて。とりあえず前からこの世界では神と悪魔の戦いが続いてたんです。』

けど、現世に影響を与えるためには自らも現世の肉体を得なければならぬ。

そこで、悪魔は人間の魂の代わりに悪魔の魂を植えた人間を作った。それが大門。

私達が気付きそして私が胎児になった時にはすでに大門は既に成人に成っていた。

そして我等は私達の掟を知っている。私達が人間に絶望、失望した時この世界を私達が一度滅ぼし作り 変える事を。

それはある意味奴等が最も望む終焉の形…。

そしてその判断材料が叶野ハヤト。彼もこの事を既に理解しているでしょう。

彼は唯一、大門の催眠術を打ち破った者ですから。

あと数週間後には審判の日です。

ですが、それよりも早く彼を絶望させようとする輩がいるのです。予想よりも早く大門が真の力に目覚めてしまいそうなのです。

異世界の使いよ、私はこの世界をこんな形で終わらせたくは無い。彼を救ってください。それがこの世界を救う唯一の方法です』

「…分かった。じゃあまずアイツを豚箱から出してくるは！丁度壁を破るのが得意な奴がいるし」

『これを彼に』

神は一枚の地図とアクセスロックを投げ渡した。

『そこに新たな彼の力が』

「うおおおおい!! 下ろせえええ!!」

「アイツの所為で雰囲気ぶち壊しだな」

凌牙は悪態をついた。

「ここから出せ! 俺はやっていない!」

「うるさい! 黙ってる!」

このやり取りも何回目だろうか。

誰もハヤトの言う事を聞かなかった。

それもその筈、ここにいるほとんどの人間がハヤトは極悪人という偽りに踊らされているから。

ハヤトはあの夜の事を思い出した。

本部長と2人で大門に会いに行った時の事を…。

あの夜2人は大門と会っていた。

無論、2人だけは大門が悪魔だという事は前々からの天使の忠告で知っていた。

「ハヤトお前は車で待機している」

本部長は1人で大門の家に入っていた。

数十分後、本部長は大門の家から出てきた。

その時から何とも言えぬ違和感と不安感を覚えた。

《LIAR》

看守に化けていた悪魔の一人がガイアメモリを使った。

このメモリの持つ嘘の力でハヤトに、この世界に止めを刺すために。

『人類は皆すべてお前のセギヤアアア!!!』

さしもの悪魔も驚いたろう。

堅い筈の牢屋の壁が一台のバイクに突き破られてしまったのだから。

「!?!?なんだ!?!?」

「早く乗って」

目の前にバイクに乗った緑の戦士が現れ、その後ろに乗せられてしまふ。

その場でバイクはターンし開けた穴から出ていった。

「君は一体?」

「凌牙の悪友だよ。あつ、あんたここ何所か分かる」

一枚の地図を受け取る。

「分かるけど」

「じゃ、案内して」

バイクは更に加速した。



ハヤトが緑の戦士に連れてこられたのは、エクシードラフトが保有する倉庫の一つだった。

中に入るとビーニールシートで覆われた一台のパトカーがあった。ドアを開けると一枚の手紙がダッシュボードに挟まれていた。

ハヤト、この手紙をお前が読んでいる時、私はこの世にはいない。お前が思っている通り今いる私は大門が化けたものだ。

このことを予期して私はこの倉庫に開発中だった【バリアス7】とバトルジャケットを隠した。

私はあの夜、大門に説得に自首を求めた。

いくら悪魔だろうと彼は半分人間だ。

少しでも良心が残っていればと思ったがそれも駄目だったのだろう。

ハヤトこの世界を救えるのはお前だけだ。任せたぞ。

「…本部長…」

ハヤトの目からは一筋の涙が流れていた。車に乗り込みアクセスロックを差し込む。

「実装!!」

ハヤトは次々と現れる赤い装甲を装着していく。数十秒後倉庫からパトカーとバイクが飛び出した。

「ラアアッ!!」

(チツ、流石に数が多いか)

怪人に囲まれたその時、緑の塊が弾丸と成ってその一角を崩す。

「凌ちゃんお待ちせよ( ^o^ ) /」

緑の戦士仮面ライダーZ Oが先程の壁破りと同じように愛機Zブリ  
ンガーを使つての体当たり、Zブリンガーアタックを決めたのだ。

更にその後ろからレーザーを放つパトカーが現れ、ディクシードの  
周りにいた敵は吹っ飛ばされた。

そのパトカーから降りてきたのはレッダーの改良版【シンクレッダ  
ー】の装甲を纏ったハヤトだった。

「待たせた」

それだけ言つとすぐに戦う構えを取つた。

「役者は揃つたぜ悪魔さん」

「ふふふ、久々に楽しめそうだ」

ブラツカーの装甲を纏う大門。

大門が着るなり装甲が刺々しい物に変わり、その姿はまさに悪魔だ  
つた。

『【ダーカー】とでも言つておこうか』

『旦那ア』

その後ろからライダーパントが現れた。

『そつちの緑の奴は俺に任せて下せい』

『いいぞ。それと異界の者。貴様の相手はコイツ等だ』

廃墟から突然操られたブルースとキースが飛び出してきた。

ターボユニットを使って高速移動している状態のタックルを喰らい  
皆と引き放されてしまふ。



ライダーパンツVSZO

『貴様さつきはよくもやってくれたな』

「さつきって、どの時？」

小首を傾げてみせるZO。

プチツと言う何か切れる音が開戦の合図となった。

『ヤアア！！』

「ハッ！」

ライダーパンツのハイキックを右腕で受け止め、左腕で殴り、足の裏で蹴り飛ばす。

壁に背中を打ちつけるライダーパンツに追撃のチョップを繰り出す。

ZOの鋭い一撃によって左肩から右脇腹へ一直線に傷が付く。

『グッ…こうなったら…行くぞ無敵の必殺技』

そう言って至近距離から何発も嘘の針ライニードルを飛ばす。

「よっと」

それを巧みに弾いたり、受け止めたり、逆に投げ返したりする。

『ギアアアア！！』

何か強烈な攻撃を受けたかのように自ら吹っ飛んだ。

「何だか知らないけど…」

ZOは近くの壁の上に飛びのり、そこで一度自身の変身ポーズをとってから再び飛んだ。

「ZOキック！！」

それはまるで振り子の動きの様に、緩やかなカーブを描いて地面に段々と並行に成っていく飛び蹴りだった。

鮮やかに爪先がライダーパンツの腹部に直撃する。

『ぬわああああ！！』  
本日三度目の悲鳴をあげてライアードーパントは倒された。

ブルース&キースVSディクシード

《ABILITY RIDE KABUTO》

クロックアップ状態になる。

いくら高速移動できるターボユニットでもこの速さには着いて来れなかった。

素早く首筋に手刀を入れて気絶させた。

「ハヤトの方に行くか」

そのままの速度でダーカーとシンクレッターの方へ向かった。

ダーカーVSシンクレッター

『ハヤト私に付いて来い。そうすればお前だけは助けてやるっ』

「断る！」

シンクレッターは新装備エンブレードを左腕の楯から抜き放ちダーカーを攻撃しようとする。

その一撃をダーカーは避け、腹部にドリルを使つての一撃を与える。

「ガハッ」

一度間合いを取ろうとするが、

『ハッ』

大門の超能力で無理やり引き寄せられ、何発も殴られる。

しかし、トドメの一撃として大振りになったパンチを避けカウンターの決めろ。

「フッ」

マスクの下で挑発的に笑う。

今度は逆に超能力で投げられる。

『馬鹿な男だ。私に付いてくれば楽になれるものを…』

「そいつはどんな事が有っても絶対あんたには付いて行かないぜ」  
いつの間にか戻ってきていたデイクシード。

『何だと』

「そいつはもういろんな奴からの【信頼】ってやつを後戻りできないくらい背負っちゃまっている。それは切ろうとしても切れる事の無い繋がりだ！特にお前みたいに汚い奴には絶対に切れない！  
そしてそれは立ち上がる力に、強さになる！たった一度くらい信頼を失ったってすぐに取り戻せるほど強い心の強さを」

立ち上がるシンクレッター。

その時、ライドブラスターから三枚のカードが出てくる。

「行くぜ！」

「おう！」

ライドブラスターでダーカーを撃つ。

その際にシンクレッターはターボユニットを使い一気に接近しエンブレードで一閃する。

『又ハッ！？』

今度はデイクシードがダーカーの腕を掴み背負い投げをする。

「オリヤっ！！！」

「ハアッ！」

更に空中を舞うダーカーをエンブレードで斬り裂く。

受け身をとる事も出来ず地に伏せるダーカー。

『貴様は一体何なんだ！』

「ただの喧嘩屋だ!!」

ダーカー超能力を使って近くの瓦礫を投げたり、エネルギー弾を放つてくる。

「よし使つか」

《FINAL FORM RIDE E・E・E・EXCEED  
RAFT》

カードを装填してから手をワキワキと卑猥に何度か動かし一言、

「少し、むず痒いぞ!我慢しろよ!」

「へっ?ちょん…ぬひゃっ!」

シンクレッターの背中をなぞるとその身を迅速に変えていった。その姿はシンクレッターの武器として開発されていた大型の銃、ヘビーサイクロンを模した【シンクレッターサイクロン】と成った。

「フンッ!」

引き金を引く。

銃口からオレンジ色の火が噴く。

『グワッ!?!』

散弾がダーカーのドリルを破壊した。

「トドメ行くぜ」

エクシードラフトのマークが金色で描かれたカードを投げ入れる。

《FINAL ATTACK RIDE E・E・E・EXCE  
EDRAFT》

「デイクシードノバ!!!」

マグマの状の赤いエネルギー弾が立て続けに放出される。

その全てがダーカーに直撃し、装甲を跡形もなく溶かしていく。

『ぬわああアアアー!!!おのれ、仮面ライダーめ!エクシードラフトめえええ!!!』

悪魔の断末魔が上がりと同時にその場が爆ぜる。

後には塵一つ残らなかった。

「ハヤト本当に大丈夫か?」

恐らくライダーードーパントの効力が消えた御蔭で周りの人は前と同じように接してくれると思うが…。

「ああ俺は大丈夫。仲間達が居るし!何よりも本部長からの信頼に応えたい!」

ハヤトは力強く笑って答えた。

ハヤトがコウとケンを連れて去った廃墟でZ.O、【風間 勝也】は突然話を切り出した。

「そつえばアイツもハヤトって言ったよな。俺達が最初に行った世界」

「……ああ、そつだな」

「結局俺らはあの世界を救えたのか…」

「……帰ろうぜ、つてお前、家無いんだっけ?てか何でここにいるの!?!」

「そらがさつぱり解からないんだ。銀色のオーロラにのみ込まれた

と思つたらこの世界にいた。それにしてもどうするか……」  
ポリポリと頭を掻きながら考え始めたふりをする勝也。

「しばらく帰れそうにないから泊めてくんね？」

「いいぜ、ただし驚くなよ」

「??？」

この後、イマジンを知らない勝也がディーネに驚いたのは言うまでもない。

魂の兄弟達よ（後書き）

次回キャラ紹介

## キャラ紹介&おまけ？（前書き）

無理やり凌牙と勝也の出会い載せました。  
文才無くてすみません。



## キャラ紹介&おまけ？

あらがみ りょうが  
【荒上 凌牙】

世界の墓場の世界の出身。

奪われ、行方不明となったディクシードライダーを拾い、初戦を除き、システムを使いこなせたためライダーになった。

行く先々でディケイドに間違われ、礼儀がなっていないという理由でその世界の中心人物を半殺しにしてしまう人。

ディケイドと間違われる理由は本来ディケイドが行くかもしれなかった世界に送られていたため。

そんな事を何度も行っていたためついた通り名が【世界の喧嘩屋】。システムのスペックの高さと元々の能力の高さによって並のライダーは余裕で一撃KO出来る。

最初に行った世界で勝也と出会い、暫らく二人で色々な世界（スカルマン、キカイダー、イナズマンの世界など）を回った後、他世界の仮面ライダーの調査に行った。

その後休暇をとって怪人の居ない世界で羽休めをしていた。

決め台詞は「その喧嘩買った！」など。

（容姿）

黒髪、ショートカット。

いつもディクシードのマークの入ったオレンジ色のTシャツを着ている。

【仮面ライダーディクシード】

外見はディケイドのマゼンダの部分がシナバーに。

頭のライドプレートは三枚。  
胸部に二枚のライドプレートが付いている。  
目の色は赤色。

#### 能力データ

身長 / 195?    体重 / 85?

ジャンプ力 / 40m

パンチ力 / 8t

キック力 / 7t

走力 / 100m 4.5秒

【ディメンションナックル】 / 30t

【ディメンションウエーブ】 / 18t

#### 【マシン・デイクシードー】

最高速度 / 460km/h

動力 / クラインの壺

形状 / オフロードバイク

使用者の声 / デイクシードと同じようにライドプレートが付いている  
コイツ単体でも次元超えられるみたいだよ。

#### 【風間 勝也】

シン、Z.O.、Jの世界出身。

デイクイドで言うクウガのポジション。

ただど作者はZ.O.が好きだから活躍させる予定。

父親の部下によって改造されていたところを地空人と兄によって助けられる。

が、体のほとんどが改造されていたため、結局は地空人に完全な改造を施して貰った。

その後、凌牙と出会い暫らく二人で複数の世界を放浪したのち元の世界に戻り怪人と戦っていた。

テレパシー、小さい物の修理等の超能力が使える。  
兄はシンになれ、Jになれる友人がいる。  
セリフに顔文字が入る。

（容姿）

黒髪、オリジナル、麻生勝と同じような姿。  
夏でも革ジャン。

#### 【仮面ライダーZ.O】

半分は人間の手で半分は地空人に改造されたため、四年間昏睡の状態に陥らなくても、自然界のエネルギーを取り入れる事が出来る。

#### 能力データ

身長 / 195 cm 体重 / 83 kg

ジャンプ力 / 135 m

パンチ力 / 7 t

キック力 / 22 t

走力 / 100 m 3.5 秒

【Z.Oキック】 ∴ 50 t

【Z.Oパンチ】 ∴ 15 t

【Zプリンガーアタック】 ∴ 50 t

#### 【Zプリンガー】

最高速度 1300 km/h

ジャンプ力 80 m。

動力 / 不明

形状／スーパースポーツ  
使用者の声／100Gの衝撃に耐え、1000 の高熱にさらされ  
ても変質しないらしいよ( ^o^ )。

【高月 優亜】たかつぎ ゆあ

世界の墓場の世界の出身。  
本作のヒロイン？

現在ベルトが無いため変身できない。  
性格は男勝り。

特異点であり、四体のイメージと契約している

（容姿）

黒髪（イメージン憑依時は目の色と髪の色が完全に変わる）、セミロ  
ングのストレート。  
スタイルは上から、並、細、並の平均的スタイル。

【仮面ライダーレイキ】

取りつくイメージンによってウォーター、ファイア、ブリーズ、ソイ  
ルフォームの四形態になれる。  
ベルトのデザインはデンオウベルトのターミナル部分が、デンカメ  
ンソードの必殺技の時に出るマークになったもの。

【ディーネ】

正式名称ウンディーネイマジン。  
モチーフは四精霊の水を司る精霊ウンディーネ。  
性格は控えめで、ふてぶてしい態度をとった優亜のフォローを良く  
する。  
身体を液状化できる。

【サラマンダ、シルフィー、ノーム】

本編未登場。

性格、外見は、

サラマンダ、誠実で騎士道を重んじる。

赤いリザードマンに鎧を着せたような姿。

シルフィー、気性が荒く常に喧嘩腰、優亜を慕っている。

緑の妖精の姿を人間の女性に近くした感じ。

ノーム、人の良い(?) 優しいお爺ちゃん。

紫色の小柄な三角帽を被った老人。

本編

「おい… テメエ俺の肉取ったな… 居候の分際で」

「何を言う凌牙戦場なぐさの上で情は無用だと言ったのはお前だろうが」  
「そう言いながら空中に浮かぶ肉に齧り付く。」

「くっ、まさかESP能力がそこまで上がっていたとは…」

「てかあんたら食卓の上で何やってんの」

『おまけ本編始まりますよ』

「ねえ前々から思ってたけど……」

「何だあ〜？」

座布団をまくら代わりに寝ながら答える凌牙。

「あんた、何で行く先々でライダーフルボッコにしてるわけ」

「なんか新しい技みたいに聞こえるな……（何でだろう？スカイライダーの姿が脳裏をよぎるな……だがあれはリン……）」

煎餅を齧りながら感想を述べる勝也。

「そりゃ、向こうが勝手に襲ってくるからだろう」

「ふ〜ん……って！どういうこと!？」

「だから、並行世界だの平行ワールドだの可能性の一つ、本来ディケイドって奴が行くはずで、何らかのアクシデントでいけなくなった可能性の世界世界に行ってるんだよ。

で、そのディケイドの旅を妨害する存在、何だっけな〜。たしかクウガをボコった時に聞いたんだよな……」

「そこんとこどうでもいいから続けて」

「……まっ、そいつが根回ししたは良いが、肝心のディケイドが来なかった世界。」

でっ俺のライダーシステムはそのディケイドを模して造られてるか  
らデザインが微妙に似ていて間違えられるんだよ……」

「あんたも大変ね〜」

「ああ、俺も間違えられた事あるは、」と

「そう言えばさあ、あんた誰？」

勝也の方を指差す優亜。

「（。・。ん？俺？」

「ああ、コイツ俺のダチの勝もってんだ。しばらくここに泊めっか  
ら」

「（^o^）ノヨロシク」

「ハア？」

『お茶がはいりましたよ』

「おお、サンキュ」

いつの間にかディーネとも馴染み呑気に茶をすすり始めていた。

「一体何なのコイツ？」

「俺が前に行った世界で仲間にしたZO」

「ZO？」

「コイツの居た世界は単体でも十分世界に影響を及ぼせるライダー  
が3人いてな……。まっ1人くらい居なくてもしばらくは大丈夫だ  
ろうけど」

「何でここに居んのよ」

「知らん」

「本人が言うなっ！！」

全力で釘バットを振り下ろすがあっさりと受け止められた。

「おお、なかなかの突っ込み！」

「何で私の周りの人は、こつも簡単にこれを止めれるの？」

「強いから？」

（ああ、イライラする）

『そう言えば御2人はどうして出会ったんですか？』

「ああ、凌牙が俺達の世界に来たんだよ」  
「そうそう、最初の変身の時に次元移動システムが暴走して」

〈回想〉

「なんだよここは…一体どこだよ……」

(なんか、怪人と戦って勝ったと思ったら、灰色のオーロラに取り込まれてそれで…)

近くには廃工場しかなく、とりあえず移動しようとした時、

「キヤアアア!!!」

「うわあああ化け物だアアア!!!」

近くで悲鳴が聞こえた。

反射的に駆け出すと、そこには数体の異形がいた。

その中の2体が近くの人を守りながら戦っているように見えた。

一体は生物的で、ぶっちゃけ一番怪人らしい怪人だった。

二体目は深緑のボディに赤い目、他のどの怪人とも違ったデザイン

(?)だった。

しばらく見ていると数の差で二体の怪人が押され始めた。

「変身」

《KAMEN RIDER・DEXCEED》

左腰のカードファイルの様な物を銃に変形させ、怪人目掛け発砲した。



数発放ち、こちらに気づいた蝙蝠と蜂の怪人を相手にする。飛び掛かってきた蝙蝠の怪人を巴投げで近くの廃材に突っ込ませ、回転の勢いを使って逆立ち、バク転で立ち上がる。蜂の怪人は手から針を飛ばしてくる。

最初の内は普通に避けれたが、数が多くなるにつれ避けるのがつらくなってきた。

「くっ…」

(カードを入れる暇がねえ…ちと不味いか、一瞬でも隙が出来れば…)

足元に落ちてた針を蹴り飛ばす。

アツサリと手で払われるが、

《FINAL ATTACK RIDE . DE . DE . DE . D  
EXCEED》

「がら空きだぜ」

目の前のカードのゲートに飛び込む。

そのままの体勢でゲートを潜るたびに加速、拳にエネルギーが集まっていた。

「ハアアッ!! デイメンションナックル!!」

デイクシードの拳が蜂の怪人のボディを捉えた。

吹っ飛ばされた蜂の怪人は空中で爆散した。

廃材置き場からようやく抜け出した蝙蝠の怪人が再び飛び掛かってきた。

「学習しねえ奴だ!」

オーバーヘッド風のカウンターキックで地面に叩き落とす。

「あばよ」

頭部にライドブラスターを向け連射する。

大量の光弾を喰らい、蝙蝠の怪人も爆死した。

爆発の影響で飛び出されるが受け身をとって着地する。

丁度その頃の2体の方の戦いも終わろうとしていた。

生物的デザインの怪人は腕のカッター使って頭と体を切り離し、赤い目の方はパンチで最後の一体にトドメを刺した。

辺りにはまだ逃げ遅れて怪我した人が数人おり、生物的な怪人だった男が変身を解いて介抱を始めようと近くの男性に手を伸ばした。

「ひいひい！よ、寄るな化け物！」

一般の人々から見れば異質な存在である彼らは拒絶されてしまった。

「おい、おっさん！」

殴りかかるがそれを男が止めた。

悲しみと仕方がないという諦めの入り混じった目でこちらを見つめている。

その中に男は逃げだす。

「…いいのかよこのままで…」

「…別に感謝されるためにやっているだけではないし、こうなる事も分かっていた…だけど、助けずにはいられなかった」

「兄貴はこういう性格だから…まあ、それに付いてくのも弟の役目つてもんだ」

後ろからもう一人の緑の戦士だった男が声を掛けてきた。

「ずいぶん、損ばかりしそうな兄弟だな」

「ああ！だがもうこの生き方は変えられない…さっきはありがとな！色々。俺は風間勝也、ZOだ！」

「【風間 真】、又の名を仮面ライダーシン」

「俺は荒上凌牙…」

一度自分のカメンライドカード見てから、

「デイクシードだ」

「いやア、あの後はまた一段と大変だったよな、ネオ生命体とフォグマザーとの戦い」

「」が居なかつたらどうなっていた事か…そう言えばお前の兄貴、俺とお前が旅に出た後、死にかけてたとか聞いたけど大丈夫か？」

「地空人に手術と再改造してもらったから大丈夫だったぜ。ついでに色々パワーアップしたみたいだし…」

(ちょっと、いきなり内輪ネタ始められても困るんですけど!!)

「あつ、そう言えば次の世界は？」

ポスターの絵柄が何やら文字の彫られた石像と光り輝く板が描かれた絵に変わった。

## キャラ紹介&おまけ？（後書き）

### 今後の予定

今後のパワーアップなどの事を考え、本来15（カブタック、ロボタック除く）ある世界を10になるように減らします。

シャリバン、シャイダーをギャバンの世界の登場人物、ウインスペクター、ソルブレインはエクシードラフトの前身として、ビーファイターの世界の一つに併合。

次回、仮面ライダーディクシード。

【開催！最強忍者決定戦！！】

「俺達、忍者じゃないけど大丈夫か？」

**開催！世界最強忍者決定戦！！**

「なあ、この格好何だと思う？」

「どっからどう見ても忍者じゃないか」  
そう凌牙の今の格好は鎖帷子に忍装束。

「ハア、だよなア…どうしよう俺、忍術ばいの分身もどき（WAR  
RIOR RIDER）隠れ身（ABILITY RIDER）RYU  
KI）しか使えないぞ」

「いや、凌ちゃんの戦闘力ならそれでも十分だって」  
ネームプレートには戸隠流助っ人忍者という文字。

一緒に有った紙には世界最強忍者決定戦！！会場案内図と書いてあ  
った。

「とりあえず、行ってみつか」

「そうだな」

凌牙達が付いたところスタジアムの席はすでに満員であった。

『さあ、今年もやって来ました！世界最強忍者決定戦！！司会兼実  
況はこの私ヘンリー楽珍！！』

まずは毎年恒例飛び入り参加者用の予選ですッ！！  
まだまだ受け付けは続いています！

最初の登場者はイギリス出身のこの忍者、城忍 フクロウ男爵ウウ  
ー！！！！』

金の兜を付けた忍者が白馬に跨って現れた。

腰の剣を高々と上げ、一言。

『ミィが最強!』

『対するは西部劇の世界からやってきたガンマン忍者、雷忍 ワイルドオオー!!!』

稲妻の書かれている青いスーツの忍者が現れた。

ワイルドは空に向かって一発撃った後、

『オレガナンバーワンダ!』

と叫んだ。

『『ウオオオオオオー!!!』』

二人の口上が終わると、席に座っていた人々が立ちあがり歓声を送った。

「おお、盛り上がっているな」

「そうね」

「んっ?なんだあれ」

解説者の横に半分に分ったような板が台座に乗っていた。

「優勝トロフィーみたいな物なんじゃない」

「そついえば勝也は?」

「そのうちでてくると思うわよ?」

そつ言つて眼下に広がる予選会場を指差す。

「それはどうい『おおつとZO強い!!!』は!?!?」

会場の方を見るとZOがカラス天狗の様な忍者を必殺の飛び蹴りZ

〇キックで吹っ飛ばしていた。

「お前何してんだアアア!!!!!!」  
凌牙の絶叫も会場の歓声にかき消された。

因みにディーネは…

『あつ、フィッシュアンドチップス二つください』  
特殊な忍び装束を着た忍者だと思われ、普通に会場の外の屋台で買い食いしていた。

(ディーネ、ケバブって売ってる?)

(多分ありますよ!各国の郷土料理も売ってるみたいですから)

(恐るべし、世界忍者戦…じゃあ2つ買ってきて)

(分かりました)

『さあ、飛び入り参加者用の予選もここで終了、ここからは対戦方法が変わります。各流派ごとに二人一組のチームを作り流派優勝を決めてもらいます』

会場のモニターに参加流派と飛び入り参加者で造られたチームの名前がトーナメント表に表示される。

『まずは今大会注目度ナンバーワン、毒斎イイ……!!!!!!』

黒い仮面に白い道着を着た忍者が現れた。

『対するは 爆忍 ロケットマ……!!!!!!』

背中にロケットランチャーを背負った忍者が現れた。

『レディーファイト!!!』

ロケットマンは手甲からミサイルを放つが全て避けられ一気に接近され殴り飛ばされる。

「フン！」

更に毒斎はミサイルのお返しと言わんばかりに手から光線を放ち、背中のロケットを爆破する。

「ぐあああああ!!!」

毒斎の圧勝だった。

『さあいよいよ本命登場、前大会準優勝流派のエース　ジライヤア  
アー!!!』

「……………」

赤い鎧に金の肩当て緑の目の形をしたスコープを付け、背中に刀を背負った忍者が、無言で現れる。

「アイツが戸隠流か…」

パンフレットの写真と今現れた、忍者の姿を見比べていると

(…なんか違和感があるな…)

『対するは今年で90歳、この大会の行ける伝説、火忍　チャンカ



ンフー……!」

「お手柔らかにのう」

『協力者は何所方ともなく現れます。試合開始です!』

ジライヤは背中中の剣を抜き、チャンカンフーは鎖鎌を構える。

一瞬の静寂ののち、お互いに距離を縮め、斬り合う。何度か斬り合うと今度は逆に距離をとる。

「……お主哲山ではないな……」

「……ああ……」

「やはりテツザンはあの時……」

「言うな!老いぼれっ!」

一瞬でチャンカンフーの近くまで走り込み、持っていた剣、【磁光真空剣】で腹部を切り裂いた。

「グフウ……やはり年には勝てんかな……だが最後にもう一度栄冠を掴むぞ!息子よ!」

「いくぜ、親父」

ジライヤの後ろのスタンド席からチャンカンフーと同じ格好をした忍者がラー麵の様な物を投げつけ、近くの柱に縛り付けた。

「おおっと、ここでチャンカンフーのパートナー、香港特製ラーメんでジライヤの動きを封じたー!」

「お前の戦う心を焼き尽くすー!」

幻の炎を麵に点火しダメージを与える。

『チャンカンフー必殺技の三病の術を使ったアア!!』

「何の!この程度…うわあああ!!」  
突然剣を落とし、暴れだすジライヤ。

その姿は何かに脅え、それを振り払おうとしているようだった。

『三病の術とは、《恐怖にとりつかれるな。敵を軽く見るな。考え過ぎるな》という戒めであり、技の威力は低くとも、その精神に与えるダメージは嘗て何人もの忍者を再起不能にしてきた!!』

「しゃあない、助けてやるか。変身」

《KAMEN RIDE・DEXCEED》

『今度は別の観客席からジライヤ側のパートナーが現れた』

「親父の邪魔はさせない」

「邪魔だ退いてるオオ!!」

壁を蹴り空中で殴りかかる。

と見せかけて敵の肩を踏み台にし、チャンカンフーに飛び蹴りを喰らわす。

「ぬおっ?」

予想外の攻撃に術が止まる。

それでも暴れ続けるジライヤにディクシードは無言で歩み寄る。

「……」

「ガアアアツ!!」「目え覚ませバカ野郎!!」「グバツ!?!」

平手打ちで思いつ切り殴り飛ばした。

「えっ??」

チャンカンフー達の思考が止まった。

(チャンス)

《FINAL ATTACK RIDE ・ DE ・ DE ・ DE ・ D  
EXCEED》

ライドブラスターをチャンカンフー親子に向ける。

まさかシリアスな雰囲気を出していたキャラがギャグパートで消えようとは…。

「流石にあのときはドン引きしたわよ…」

「戦っている時に隙を見せる方が悪い」

「空気読もうぜ(´・`・´)」

「にしても俺を殴る事は無かったんじゃないか？」

会場の外のベンチに座って駄弁っている凌牙一行、その隣に全身から怒気を放っているジライヤがいた。

「てか、いつまでその恰好してるの？暑苦しい」

「俺の勝手だ」

「お前の中身が哲山じゃないからだろ」

凌牙が小声で話しかける。

「なっ」

「俺に負けたが、あの爺さん相当な手練なんだろ？」

そんな奴が言っていたんだからかなり信憑性は高いぜ」

「くっ……ちょっとついて来い」  
そう言っって背中を向けてジライヤは歩き出した。

数分後凌牙一行は【戸隠流忍法武神館】という看板を出している道場にいた。

「なあ、ここってマンションじゃねえの」

「前の大会の賞金で元々住んでいたこのフロアを買い取って道場に改築したんです」

髪を後ろで束ねた女性がお茶を差し出した。

「もうすぐ、トウハも着替えてくるのでお待ちください」

「トウハって誰？」

「俺だよ」

近くの襖が開き、黒い道着を着た青年が入ってきた。

「その声、ジライヤか」

「じゃあ、やっぱり中身が……」

「違うんだ」

「ああ、そつだ。お前らが言った通りだ。やっぱりまだ、ひよっこみたいでね俺は……」

「だな、剣筋も若干バラバラ、写真から感じた闘志の質も違う。

それにしても何故お前がジライヤをやっている。本物はどうした？」

「先代ジライヤである俺の師【山路 テツザン】は前大会中に既に

他界している」

「……なっ!」「……」

その言葉に驚く凌牙一行。

「事故なんです…父は同じ流派の忍者の攻撃が当たってしまった」

（1年前）

四人の忍者が林の間を駆け抜け名がら戦っていた。

最初はドームの中で戦っていたが、あまりに激しい戦いに、戦場を変えたのだ。

「タアッ!」

一人目ジライヤと

「リヤアッ!」

二人目毒斎のタツグ。

「フンッ!」

三人目は黒いフードを纏い首の辺りから黄色のマフラーを垂らした者。

「……」

四人目も三人目と同じ格好だがマフラーの色が白の者。

黄色のマフラーの者が火を噴く。

それをバク中で避けるジライヤ。  
だが、黄色のマフラーの者を狙ったと思われる毒斎の光線がジライヤに当たってしまった。  
何が起こったか把握しきれていないジライヤの腹部をを白いマフラーの者の膝蹴りが捉えた。  
吹っ飛ばされたジライヤは木に激突。  
更に木が根元から折れ、ジライヤはその下敷きとなった。

「親父イイー!!!」

トウハの叫びが林に木霊した。

「そんな事が…」

「違う!!!」

突然トウハが叫んだ。

「親父はアイツに殺されたんだ!」  
眉間に皺を寄せながら壁を殴る。

「あのタイミングじゃどんな忍者でも回避は不可能。それにあの対戦相手と息の合った動きをしていた!!!それに、あの後アイツは親父の懐をあさっていた。  
多分アレが目的だったんだ」  
トウハが指差す先には割れた板の様な物が。

「コレどこかで…」

「あのプレートが片割れか」

「そうだ。俺達戸隠流の忍者は代々これを守ってきた」

「そのプレートはボードと言って…」

「エミハ！その事はこの流派の者以外に行ってはいけない筈だ！！」

「いいえ、協力者である彼らには効く権利あるわ！」

「ッ！？」

エミハの剣幕に驚くトウハ。

「…好きにしろ」

そう言つて道場から出ていく。

「すみません。」

前にもつと明るくて陽気な子だったんです…。

父が死んでから復讐のことしか考えて無くて。

この間も一晩中剣を振り続けたりして…」

(見失つてるな…これじゃいつやられてもおかしくない)

「ぐわああッ！？」

突然、扉を突き破つて吹っ飛んでくるトウハ。

勝也と俺はトウハの飛んできた方に注意し、優亜はエミハを庇いながら扉から遠ざかる。

「何があったトウハ」

デイクシードライバーとカードを取り出しながらトウハに尋ねる。

「近くを走つてこようと家を出た瞬間、連中にやられた」

道着を脱ぎ捨て、ジライヤプロテクターを纏い始める。

道場にローブを纏った者達が現れた。

「テメエら何者だ！」

『道場破りだ!!』

そう言ってローブを投げ捨てた。

その姿は仮面ライダー一号に酷似していたが、マフラーの色が違っ  
た。

しかも四人いる。

「こいつらは一体……」

「シヨツカーライダー……」



**開催！世界最強忍者決定戦！！（後書き）**

シークロスの方を書き換えようと思うのでしばらく公開しません。  
何ヶ月かかるかなあ…。  
すみません。

次回【我古来闘者悪魔不動】  
お楽しみに

## 我古来闘者悪魔不動

「「変身」」

《KAMEN RIDE・DEXCEED》

「シヨッカーライダーだ…」

「マジかこいつらが…」

ZOは肩を竦める。

「知ってるのか？」

「俺達<sup>ライダー</sup>の力に最初になった男を模してとある組織が作った、最悪の戦士だよ…」

ジライヤの疑問に答えつつ、腰からライドブラスターを取る。

「そんな…」

「要は単なる模造品だろ、何ビクついてんだ？」

《ATTACK RIDE FOLLOWINGSHOT》

追尾弾で確実に当てようとするが、紫色のマフラーのシヨッカーライダーの電撃で相殺してしまう。

「ちっ、厄介だな少し」

「てか、家で戦うなよ」

「合点」

凌牙は白と緑のマフラーの二体を掴み、ZOは紫色の奴にタックルし、ジライヤは桃色のマフラーをしたシヨッカーライダーを斬り飛ばして戦いの場を屋外へ移す。

「トリヤアー！」



「ふう〜こんなもんか」

『んじゃ俺はこれで』

そう言っつてシンクレッターは残像を残しながら消えた。

そこへ見知らぬ男が現れ、シヨツカーライダーの部品をいくつか集め始めた。

「やはり、粗悪品ですね。ですが私の最高傑作デイトライトの為の糧になつてもらいましょう」

男はメモリーチップの様なパーツを拾うとそう呟いた。

「おっさん何してやがんだ」

「デイクシードですか…目的は済んだので帰らせていただきます」  
腰にバツクル当て、褐色USBメモリの様な物を取り出す。

《DOPANT》

それを腰に刺すと、男は褐色の怪人に姿を変えた。  
全身に男の持っていたようなメモリが張り付けてあり右腕は白い機械になっていた。

顔にはアルファベットのDの形をした紅い眼が。

「なッ!?!」

『それでは失礼します』

《ZONE》

その怪人は瞬間移動したかの様に消えた。

(何だっただんだアイツ?)

「ナイス凌ちゃん」

勝也とトウ八が駆け寄ってくる。

「どうかしたの？」

「いやなんでもねえ…戻ろうぜ」

トウ八宅

「何だって、俺達が居ない間にカラス天狗が盗んで行っただけ」

「ゴメン完全に油断してた…」

「怪我はねえんだな二人は」

「パコというのは元々とある人達がこの地球に隠した途轍もない力を持った宝の事なんです。

その隠し場所が書かれたボードを代々、戸隠流忍者が守っていたのですが。

数代前の頭首が戦いの最中に二つに割られ、片方は戸隠、もう一方は行方不明になっていたのですが、なぜか数年前から始まったあの大会のトロフィーの一部として見つかったんです。」

「元々、戸隠が極秘で守っていたものだったからな。言っても返っては来ないだろうと言う事で戸隠もこの大会に参加した」

「っで、その大会で親父さんは死んじゃったんだな…」

だが何故毒齋はそのパコが欲しいんだ？

それを守る役割だったんだらう？

わざわざ仲間まで殺して」

「奴はパコが持つ強大な力に呑まれたのさ…奴も父さんの様な精神

力があれば……」

トウハの顔が更に険しくなった。

「まっ、要は勝ちゃいいんだろ、大会で」

（毒斎のアジト）

「もうすぐ、パコのが手に入ります大首領様」

毒斎が片膝をつきながらモニターに向かって話しかける。

「だがそのためには、仮面ライダーとジライヤを抹殺せねば」

毒斎の背後から二体のシヨッカーライダーが現れる。

「……私に策がございます」

シヨッカーライダー二号がある策を提案する。

「策とは？」

「大会のルールを……」

（翌日）

会場に選手が全員集合すると、司会が慌てた様子でこうアナウンスした。

『ええ、今大会、試合内容が変更されましたので、ルールの説明を致します。』

今回は予選を勝ち残ったすべての忍者に一か所で一気に戦い、生き残った流派が優勝となります。

他の流派と手を組んでもよし、とにかく最後の一人、もしくは同じ流派の2人になるまで戦いは続きます』

「何だつて！ルールが変わっただと!?!」

「しかもバトルロワイヤルって」

控室でたった今聞いた内容に衝撃を受ける一同。

「……シンプルに行こうぜ、要は全員倒せばいいんだ」

「ああ、優勝を狙えばいい」

「果たしてそういくかな」

毒齋がいきなり三人の前に現れた。

「毒齋!?!」

「紹介しよう、私のパートナーのマミーレジェンドルガだ。得意技は『フンツ』」

ミイラ男の様な怪人が、仮面の様な物を辺りの忍者に張り付ける。

すると、仮面を張りつけられた忍者たちが一斉に凌牙達を襲い始めた。

「うおっ!?!」

「なにつ!?!変身!?!」

「テリヤアア!?!」

既に戦闘準備を終えていたジライヤと驚きながらもその姿をZ.Oに変えた勝也はともかく、カードを取り出しづらいこの状況で凌牙のみが取り残されていった。

「御覧の通りの洗脳だ」

『ライダーキイイクツ!?!』

生身の凌牙に向かってシヨッカーライダーのライダーキックが襲うが、

「凌ちゃん!?!ハッ!?!」

直前に無理やりZ.Oが辺りの忍者を蹴散らし、間一髪のところではシヨッカーライダーを横から殴り飛ばした。

「サンキュー、勝也！！変身」

《KAMEN RIDER・DEXCEED》

僅かな隙に変身し、ショッカーライダー一号、二号をディクシードが引きつける。

ZOは洗脳された忍者達に苦戦を強いられながらも、徐々にマミーレジェンドルガへ近づいて行く。

ジライヤは毒齋しか見ていなかった。

いや、毒齋しか見えていなかった。

復讐すべき相手が目の前にいた事で完全に頭に血が上っていた。

「ハアアアツ！！」

気合いと共に斬り込むが、その一撃はひらりとかわされ刀を抜いた毒齋の一閃によって肩口を斬り裂かれた。

「あの野郎完全に我を忘れてやがる……」

『おい、貴様俺ら二人を前によそ見とはずいぶん余裕じゃねえか？』

『ライダーペアアンチ！！』

二号の毒煙を避けようとしたところを、一号のライダーパンチを喰らい吹っ飛ばされる。

「仕方ねえ」

そういつて、ライドブラスターを取り出し、

「フンツ！！」

持ち手を思いつ切りバツクルに叩きつけた。

パキツという小気味よい音と共にディクシードのマークの入ったバツクルが割れた。

『気でも狂ったか？』

「いや、全く」

割ったバツクルの欠片を掃うとその下には何かをはめる台座があっ



た。

腕に付けていたディスクシードライバーの本体をプレスレットから外し、ベルトの台座にはめた。

《LIMITATION LIBERATING・FULLDRI  
VE・DEXCEED》

変身時と同じように複数の虚像が再びディスクシードを覆い、ライドプレートが頭部に2枚、胸部に一枚追加された。

【ディスクシードフルドライブ】

ライドプレート増やす事により能力の上昇を安定させ、制限されていた力を解放した姿。

「ハアッ!！」

『グオツ』

ディスクシードのパンチが一号の腹部を凹ませる。

『なっ、一号!?!』

「遅い」

《ABILITY RIDE ICHIGOU》

「ライドアアアきりもみシユウウト!！」

二号を掴み、空高く投げ飛ばす。

きりもみ回転しながら上昇していく二号は呟いた。

『何故その技を…!』

「秘密」

ショッカーライダー二号はライドブラスターの連射を空中で受け爆発した。

『チィィ、貴様アアア!！」

腹を押さえてダウンしていた一号が襲いかかってくる。

「ライドアアア電光キィィック!！」

デイクシードの鋭いキックがショッカーライダーを飛ばしその身を破壊した。

「勝也アア、そっちは終わったかアア!!」

「もうちよいかかるけど一人でいける!!」

「了解」

ジライヤの方へ向かう。

「……………ツク……………」

『ふふふ、どうしたジライヤ貴様の力はその程度か?』

瀕死の状態で倒れているジライヤ。

肩のプロテクターは斬り裂かれ、胸当てはひび割れ血が滴っていた。

『ジライヤどうだ、お前もこっちに来い』

「……………」

『こっちに来れば最強の力が手に入る。テツザンを超えられるぞ』

「……………ツ……………」

毒斎の言葉にトウハが僅かに反応する。

『こっちに来いトウハ』

毒斎が仮面を外す。

そこにあつた顔はトウハの父テツザンだった。

「……………!? お・や・じ?」

トウハの目が見開かれる。

『さあ、来いトウハ』

毒斎が手を伸ばしてくる。

トウハもそれに向かって手を伸ばす。

二人の手が触れ合おうとした瞬間、

「フン!!」

『!?!』

トウハが拳を握りしめ、毒齋を殴った。

『トウハ、貴様!!』

「・・・親父は死んだ・・・。それに俺はジライヤだ!俺達は遠い過去から、この星を守り続けていた!!我古来闘者悪魔不動!!俺は貴様の様に魂を売りはしない!!」

ジライヤは力を振り絞り立ち上がって刀を構える。

「よく言った。トウハ!いや、ジライヤ!!」

《FINAL FORM RIDE JI・JI・JI・JIRA IYA》

「ぬおっ!?!」

デイクシードの手刀がジライヤの背中を通過すると同時に姿を赤と黒の忍装束から青い鎧武者の様な姿に変えた。

【ジライヤジライシン】

「なんだ!!これは!!」

「気にすんな!!」

『ぬっ、おのれエエエ!!』

仮面を再びはめ、刀を構える毒齋。

「ハアッ!」

ジライヤが上段から斬りつける。

それを毒齋は刀で受け止めるがあっさり砕け散り右肩から腹まで切り裂かれた。

『なんだその力は!?!』

「これがジライヤと言う名の持つ力だ」

右手から光線を出そうとするが、デイクシードがライドブラスターでその手を撃ち抜いた。

「トドメも頼むぜ」

「おう！！」

《FINAL ATTACK RIDE JI・JI・JI・JIR  
AIYA》

ジライヤジライシンの刀の側面を毒斎に向ける。

すると青い雷が落ちる。

手首を軽く捻り切っ先を真っ直ぐに向ける。

左手を突き出し刀を右肩の後ろで構え、そこから振り下ろす。

【デイクシード真空剣】が毒斎を文字通り一刀両断した。

『ウアアアア！！』

毒斎の断末魔と共に後ろで爆発音がした。

（勝ったんだな勝也）

仮面が割れた瞬間、毒斎が爆ぜた。

「大会はまた後日となったらしい」

「そうか…頑張れよ」

ボロボロの会場から運ばれる忍者たちを見ながら、凌牙は答えた。

「ああ、もう俺は迷わない。ジライヤとしてこの大会に優勝して見せる」

「そうか、じゃあな」

「おう！！」

『次の世界は』

ポスターの絵が変わる。

暗闇の街の中に止まる変わった形のパトカーとバイク、夜空には小型のヘリが描かれていた。

「ジバンか」

**我古来闘者悪魔不動（後書き）**

【デイクシード・フルドライブ】

デイクシードが制限を解放した姿。

力と世界への存在を安定して維持できるようにライドプレートが追加された。

その能力は昭和ライダーの力の解放と性能の底上げである。

使用しなかった理由は、「カードを横から入れるから入れにくい」。

く次回く

「バイオロンって何」

「おい勝也、完全に間違われてるぞ」

バイオロンと間違えられてしまったZ.O。

「やめて、ナオトお兄ちゃん」

少女の悲鳴が響く。

次回【戦うお兄ちゃん】

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0281k/>

---

仮面ライダーディクシード

2011年10月5日20時20分発行